# タイトル考えてないの投稿時に気付きました

ホイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タイトル考えてないの投稿時に気付きました

【Ｎコード】
Ｎ４３３３Ｚ

【作者名】
ホイ

【あらすじ】
転生オリ主君＋オリ設定ありでの話です。
勤務時間の空き時間等で書いていますので、一話一話が短く不定期になると思います。
被りの無いように考えていますが、有りましたらごめんなさい。

# 一個目！

「ねぇ、異世界に転生ってしてみたくない？」

知らない女に声をかけられた。

「えっと…宗教なら間に合ってますが？」

「違う違う！新しく楽しい素敵世界に行ってみたくない？」

あぁ！なるほど！

「病院から勝手に抜け出したらダメじゃないですかー」

「そっちの人じゃないわよ！失礼な人ね！」

「おばあちゃんご飯はさっき食べたでしょう？」

あっ、プルプルしだした。

これはヤバイ！と本能が轟き叫ぶ。

だが、しかし！ここで俺は追撃をーーー「冗談ですごめんなさい」ーーー行うはずもなく頭を下げた。

女性はため息を一つ吐くと話を続けた。

「とりあえず一回死んで、転生なさい」

その一言と共に俺の意識はブラックアウトしていく。

くっ…！このまま目を閉じてしまえば本当に終わってしまうのか…！

「俺には…俺にはまだやるべき事が…！！」

「へぇ…これに耐えるなんてやるわね。で？やりたいことって？」

え？

えーっと、なんだろう？

勢いで言っちゃったから特になんもないよ？

んーっとー…あっ、気持ちよくなってきた！

って、違う違う。理由。そう理由だ！

これでいいや。

「これ読み終わってな…（スパァァンッ！）」

頭が…痛い…です。

だんだんと目蓋が落ちていき、俺の意識は閉ざされた。

…筈なんだけど？
不思議体験アンビリーバボーだと思ってたけど違うのか？
目を開けたら、街中から暗闇ってのは充分アンビリーバボーだよね。

「さて、とりあえず来てもらった訳だけど、何か聞きたいことある？」

さっきの人だー。

手にはハリセンを装備済みな訳ですね。

「ごめんなさいお金これしか持ち合わせが無く…（スパァァンッ！）」

「とりあえず、君に転生してもらうからわかった？」

「わかりましたー」

「聞き分けがいいわね。「わかりましたー」…願い事叶えて「わかりましたー」…あげるわ。何がいいかしら？「わかりましたー」あっ、もちろん元居た場所には「わかりましたー」…帰せないわよ？」

スパパパァァンッ！！

「それじゃあ、私が口やかましいみたいじゃない！？」

「ごめんなさい」

「で？何がいいかしら？」

この本の続きを…！

なんて言っちゃったら叩かれるのは目に見えてるので言いません。

あれ痛いんですよ？

んー、とりあえずはこれかなぁ？

「両親に俺に変わる幸せな何かをあげてください。」

「え？えーっとそれ位はいいわよ？」

あれ？驚いてる？

転生するって事は死んだって事でしょ？

「つっ、次は？」

えー別にいいよ。なんて思っても口に出せるはずもなく、何か無いかと探してみる。

「この姿のままはダメですか？」

「それは出来ないわ。両親がフランス人なのに、見た目日本人なんて可笑しいでしょう？」

「ですよねー。なら記憶消してください。そうすれば未練なんて無くなるでしょう。」

「本当にそれでいいの？後悔は無いわね？で、次は？」

勘弁してください。もう良りませんから！
願い事の押し売りされるなんて初めてです。
さっきの雑誌をパラパラーと開いていきますかねー。
ぶっちゃけあんまり漫画とか読みませんので何でもいいや。

「これください」

指差した先にスーツを着たダンディなおっさんが描かれているんです。
漫画だから変な特殊能力とか持ってるでしょ。

「そっちの趣味！？」

「おっさんはいりません。この人と同じ力ください。」

「何でネギまのタカミチ！？普通そこは『王の財宝』とか『無限の剣製』とか主人公級の力じゃないの！？」

これネギまって言うんだね。初めて知った。
それと王の財宝とか無限の剣製て何？
なにそれこわい

「目指せダンディなおっさん？みたいな？」

「…はぁ、もういいわ。もう行ってきなさい。説明してもどんな世界か分からないでしょ？」

呆れられましたねー。平和なら何でもいいや。

「はーい。」

「それじゃあ、いってらっしゃい」

「その前にお腹空きました」

「知るかぁ！さっさと行けぇ！！」

おっと、まさかの落とし穴。
こう言う時はやはりこれしかないかな？

「Ｉ' ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋ！」

「帰ってくんな！」

・　・　・　・　・

はぁ、やっと行ったか。
何あいつ？めっちゃめんどくさいんだけど？
って！あいつの記憶消したらここの事も忘れるじゃない！？
しまったなー…。
なんかこのままだとムカつくから、これをこうして…こうしてやる！
よし！頑張った私！
…次何しようかなぁ？暇だなぁ…。

## 二個目！（前書き）

更新が早い場合は、「あぁ、会社暇なんだな…」程度に考えてください。

## 二個目！

この世に命を宿し社会の歯車の一部となりて、時既に四年目。
と言いつつも、もうすぐ五年目になりそうです。
あの時のハリセンのあなたへ。
本当に記憶は消して欲しかったです…！

思い返す事、産まれたとき。
新たな生を授けた実感などなく、ただ目が見えず、体思うように動かず、声をあげれば泣き声。
泣けば口を塞がれ得たいの知れない謎の液体を体内へと流し込まれるか、公然の面々での羞恥プレイ…『だっふんだ祭』。そして謎のジョリジョリ。
あの出来事はやはり宗教だったのだと。願い事はうまく勧誘するための口から出任せ。我ながらうまく騙されたもんだと思う。
そして今は黒ミサ等の儀式の途中なのだろう。
俺の運命はいかに！？
タコに！？いくらに！？

等と思っていた時期もありました。

いや、まぁ普通に考えたら解ることなんですけどね。
産まれ、筋肉が未発達なので活動ができず、泣けばトイレかお腹すいたのどちらかですからね。
もちろんジョリジョリは父親です。

それがわかればもう大変ですよ。

考えてもください。今は生まれたての赤ん坊だとしても、元々はいい年した男だったわけなんですよ？
口にもしたくない事が繰り広げられてるわけですよ。
まさに黒歴史ですね。
やり直しを要求する！

まぁ、それとは別にあまりにも手の掛からない子供だったでしょうね。
子供らしい駄々はあまり捏ねませんし、好き嫌いも無く食べるしで、子供らしさは欠けていたんではないかと思います。

ただ、イタズラをする時は力一杯イタズラしましたよ？
隣の家の一夏君を巻き込んでですけどね。

そんなこんなで、明日には誕生日なんですけど、ここでまさかのサプライズ。
なんとあのハリセンの人から手紙があったんですよ！ポケットの中に。
なぜ今ごろになって…とか何でポケットやねん…とか色々思いますが、そんなものは１ｋｍ程向こうに投げ飛ばして、手紙を開いてみます。

『＊・＋＜・－＜＊＋－＜・，・＝，”）－』

うん。わからない。

『＊＜ー・，＜”ー・）”＋＝”＝）＊＊・，）＝＾＋…ざまぁみろ。』

くっ…くそぅ！
あんな恥ずかしい思いをしたのはあの人の策略だったか！？

『そうよー』

くぅっ！やってくれる！あんなにおちょくったのがき気に入らなかったのですか！？

『気に入るかぁ！』

で、何ですか？

『会話出来てるのはスルーなのね？』

モチのロンで。

『…くそっ！本題を伝えるわ。君の五歳の誕生日が来たら記憶が消えるわ。』

そうですか。

『記憶が消えた後、君の年齢に応じて、君にあげた力を使える様にしておくわ。』

そんなものがあったの忘れてました。

一応教えてもらっても？

『ポケットに手を入れて居合いの要領で握りこぶしを出して拳圧を飛ばす居合い拳。』

…はい？

『魔力は有るけど全く使えない体質で魔法は使えないわ。その代わり気を巧く扱えるわ。』

…阿呆？

『魔法。んで、魔力と気の二つを合成して使える究極技法である咸化法。』

なにそれこわい。

『どれも体を鍛えてないと効果が薄いから頑張って体を鍛えなさい？』

はーい。

『それじゃあ、死んだらまた会いましょ？またね。』

またねー。

との事です。

さてさて、これで俺の人生も終わりなんだと思うと、後悔もやり残した事もあったんじゃないかと思います。
後、半日もすれば本当に死んだことになりますからね。
最後の最後を楽しみつつ生きたいですね。

・・・・・・

と言う訳で、もう夜の九時です。

ぶっちゃけ眠いです。
なんと言ったって、外側は5歳児ですからね。
こんな子供をこれ以上起こしとく訳にもいきませんね。
明日からは俺の体ではないのですから。
未来ある子供のために！
なーんて、うん。眠くてテンションがヤバイですね。
新しいこの子の未来にＮＩＣＨＩＲＩＮよ！
…おやすみなさい。

・・

・・・

この日の夜一人の子供が高熱と激痛を訴え病院に搬送された。
病名は不明とされ、高熱に苦しみ痛みに悶えまた暴れる。
病院に搬送されたその日の日付が変わるまで、悲鳴と叫び声があげ続けられていた。
日付が変われば今までの症状が嘘の様に引き、半月ほど子供は目覚めること無く、まるで死んだかの様に眠り続けていた。

## 三個目！（前書き）

いや、本当にタイトルはどうしましょう？

## 三個目！

今日七歳になりました。
この二年間の事を振り替えってみましょうか。

五歳の誕生日の日に高熱を出したらしいのですが、それ以前の記憶が全くございません。
馬的に言うと記憶にございません。

ただ僕が覚えているのは、自分の名前だけで両親の名前すら知りませんでした。
親不孝者ですね。
ずっと友達だった隣の家の一夏君の事も忘れてましたし、千冬お姉さんの事も忘れてました。
無いなら作れば良いじゃない精神で、後は野となれ山となれ。

軽快なフットワークと、素敵なアクティビティ溢れる一夏君と、僕にとっての初恋の人！だけど彼女は一夏にゾッコン！篠ノ之さん家の箒ちゃんと、三人でよく遊んでました。
後、千冬お姉さんの友達で、箒ちゃんのお姉さんの束ちゃん（こう呼んで欲しいらしいです）にも可愛がってもらってます。
いやー束ちゃんと仲良くなるまで長かったよー。
箒ちゃんの可愛さを語り合うことであそこまで発展するとは…。
あえて言うならば、あの右が決まっていたら僕はここに立っていなかったでしょうね。

それ以外に覚えている事は、居合い拳とか言うなんか不思議な必殺技が使えるって事と、体を鍛えろってくらいでした。

この体を鍛えろってのがまた曲者なんですよね。
僕は、普通の人より少しだけ筋肉の付きが悪いみたいでして、普段から難航しています。
ですので、箒ちゃんの家は剣道場も経営なされているのですが、そこに僕と一夏君は通ってます。
一夏君は才能あるらしいのですが、僕には、剣の才能は全く無いらしいのです。
ですので、行ってもいつも基礎体力の底上げと言いますか、千冬お姉さんと共にランニングや柔軟体操を行っています。
また、普段は何かごそごそしている束ちゃんが居る時は、筋トレのメニューとかも考えてくれています。
束ちゃんて普段はあれなんですけど、実は本当の天才なんですよね。
この間は、何か凄い学会か何かに、論文と発明品を発表したらしいけど、まともに受け取ってもらえなかった！って、怒ってましたね。
僕の誕生日には凄いことするから、テレビ見ててね！って言ってましたね。
まぁ、そんなこんなで未来の細マッチョ計画は難航しつつも皆様の助言のもと日々頑張っております。

…はてはて、ここまで考えてると、僕は一体何者なんでしょうかねぇ？
まぁ、普通の七歳児ではないのでしょうね。
漫画的展開で、知らないおっさんとぶつかった拍子に、意識が入れ替わったとか？
それとも過去の高熱事件の時に前世のわ・た・し♪と混ざりあったのか？

…まぁ、そこら辺はどうにかなるでしょう！きっと多分おそらく。

そんなことより、今は一夏君と一緒に、束ちゃんに言われた通りにおとなしくテレビを見ています。

・・・・・

『ニュース速報です！先程、日本を射程圏内に位置する約二千五百のミサイルが日本に向けて発射されました！』

へー…。そうなんだー。

『もう日本は終わりです！』

「ねぇ一夏ー、このミカンおいしーね。」

「何でそんなに落ち着いてんだよ！？」

「え？だって慌てたって何も出来ないじゃん？だから押し入れから出ておいで？」

さっきまで隣にいたはずなんだけどなぁ。
まぁ、千冬お姉さんの弟だしね。
何があっても不思議じゃない。

「本当に大丈夫なのか？」

「さぁ？」

「おねぇぇぇちゃぁぁぁんッ！！」

ふぅっ、不安を煽ろうと思ったのにこのシスコンめ…。

『続報です！今日本から飛び出した白い何かがミサイルを破壊しております！頑張れ白い何か！ひゃっほぅ！！』

テレビの中継を見てみると、白いロボットぽいのが、高速で移動し、ミサイルを切り裂いていく。
切り裂かれるミサイルが爆発して、近くのミサイルを巻き込み誘爆を起こす。
それを何度も繰り返し、ミサイルを破壊していく。

て、言うかあれ千冬お姉さんじゃね？
切りに行く時に、握り直す癖とか、全体的な雰囲気とか？

僕は、隣でアナウンサーと同じように、ひゃっほぅしている一夏に声をかけた。

「一夏。明日箒に会ったら、無事でよかったー！って抱きついてきな。」

「何で箒に？」

「幼馴染みを心配するのに理由なんて要らないだろ？」

「そっか。」

頑張れ、箒。僕的サプライズ。
…うん。頑張れ。

再度テレビに集中する。
もうすぐ終わりかな。
何て言うか凄いね。これ。
もし、あれが千冬お姉さんだとしたら、あれを作ったのは束ちゃん？

「ブゥゥラァボォゥゥウ！！」

もしかして誕生日にテレビ見とけってこれの事？
…もしかしてハッキングして、ミサイル撃ったのも束ちゃん？
いやいやー！さすがにそれはないでしょう！うん！無い無い！

「いぃぃっっやぁっほぉぅっっっ！！」

ホントに無いよね？

まぁ今は、そんな事よりも…

。

「一夏うるさい。」

一夏のひゃっほぅをどうにかしないとね。

**フォーッ！！（前書き）**

グダグダが加速する…！

**フォーッ！！**

あれから数日が経ちました。
世界は目まぐるしく動いています。

あの日ミサイルを全て撃墜したのは、『ＩＳ』と呼ばれる、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォームスーツらしいです。
製作者はやはり束ちゃんらしくて、あの後、「どんなもんだい！」と言っていました。
しかし、ミサイルを発射させたのも束ちゃんなので、今はまだ未成年で逮捕はされてはいませんが、かなり特殊な環境下にあるみたいです。
このままで行けば、束ちゃんだけではなく、篠ノ之家の皆様にも、何かしらのアクションがありそうですね。
現に、最近の箒ちゃんは、学校でも苛められたりしてますし、家の方にも何度も立ち入り捜査されたりなどしています。

そして今、世界がＩＳに注目しています。
例えば、「第三次世界大戦を起こす為の秘密兵器だ！」とか「篠ノ之束は我が国の技術を盗んだニダ！」とか「ロマンが足りない！」等と反応はバラバラですが、このままでは本当に日本が、全世界から攻められるのではないでしょうか。
そこで日本政府の打ち出した方針が、ＩＳの技術を世界に公表、そしてＩＳ国際委員会の発足への申請。
等と言ってますが、裏ではどんな取引がなされたのかは知りません。
本当に世界は目まぐるしく動いています。

ところで、僕のマイエンジェル箒ちゃんなんですが、先程申した通

り、学校で苛めにあってます。
まぁ、僕や一夏が側に居る時は大丈夫なのですが、やはり側から離れた時などは危ないですね。
一応、一夏に側に居てあげてとは言ってますが、一夏にも都合が有りますし、防げないのもまた事実です。
本日のメニューは、朝から上靴が無い、机の中にゴミと続き、そして授業前の今、箒ちゃんに向けて、黒板消しが投げつけですね。
…そろそろ、一度大暴れしても構いませんよね？
一夏の米神もピクピクしてますね。

「お前等いい加減にしやがれえぇぇぇッッッ！！」

って、既に殴りかかってましたね。
ならば、僕も怒っても良いですよね？

側にあるこの椅子を持ち上げて、ただ投げつける。
椅子は窓を突き破り、中々良い音を響かせながら、消えていった。
クラスの中が静まり返るなか、僕の両腕に新しく椅子をリロード。

「今、箒に黒板消し投げた奴は誰だ。…前だ。前に出ろ。」

両腕にある椅子が、再度宙に待った後、教室に突入してきた教師陣に取り押さえられた。
それからは、親を呼び出され、長々と説教されたりしたが、後悔はありません。
「窓と窓枠壊してごめんなさい。次からは直接ぶつけるんで。」と、

言っておきました。
教師は顔を真っ赤にして怒鳴っていましたが、僕には聞きません。
苛めに気付いていながら、見て見ぬふりしていますからね。
それについて尋ねても、知らないと言っていましたが、最終的には
束ちゃんがどうのこうのと叫んでいました。
確かに、束ちゃんのとった手段は
良くなかったと思います。
そこまで急がずに、もっとじっくりといけば良かったのではないか
？とも思います。
しかし、それとこれは話が別です。
例え姉が人を殺そうと、親がテロリストだろうと、本人には全くも
って関係ないのです。
同一視してしまうのは、仕方ないことだと思います。
ですが、大人が、ましてや教師と言う立場の人間が、生徒に対して
行って良いことだとは僕には思えません。
このままだと、第二の僕や第三の僕が出てくることでしょう。
何て言うか、Ｉ'ｌｌ　ｂｅ　ｂａｃｋ？違う気しかしませんがこ
んな感じです。
…これ。以前にもやったような気がしますね。

そんなこんなで解放されたので、よしとします。
父にはやるならもう少し穏便に、言い逃れのできない状況を造り上
げて、徹底的に追い詰めろ！と言われました。
母には特に何も言われませんでしたが、修繕費を見て真っ青になっ
てました。
横から覗いて見ると、僕も顔が真っ青になったのは仕方ないことだ
と思います。
ごめんね、ママン…。
怒らずに受け止めてくれてありがとう。

## 五個目！（前書き）

感染性胃腸炎…！
今年も来やがったか…！

## 五個目！

あれから、時が過ぎもうすぐ五年生が始まり申す。
あれから、皆が拙者を避けてたでござる。
まさに触らぬ神に祟りなしでごわす。
一夏とマイエンジェルしか話をくれませぬ。目も会わせてくれませぬ。

まぁ、原因は僕にあるのですから仕方ない事だと諦めています。
毎年、知らない子や嘘だと思っている子が居るのですから『篠ノ之束の妹だから』で嫌がらせをする子が居るのですよ。
以前みたいに壊したりはしないですよ？もうモヤシとご飯は嫌なので。

一夏はそこまで嫌がられはしていません。
嫌でも僕のが印象に残るのでしょう。
それどころか、最近ではかなりのモゲ期…モテ期に差し掛かったみたいでして、フラグを建築してるみたいですね。
マイエンジェルも気が気じゃないみたいで、モキモキしてるのが手に取るようにわかります。勘弁してください。
一夏はイケメンですからね。優しいですし。朴念神ですが。

「いってぇ！なんだ！？」

「一夏どうした？」

「いや…頭を殴られた気がするんだけど？」

「気のせいじゃない？何もないし。」

「だよなー。なんだったんだ？」

居合い拳炸裂！
たまには良いよね。こんな事しても。
ほほほのほっと。

そんなこんなで今は春休みです。
実は今日でマイエンジェルは引っ越しする事になっています。
誰にも言わずですが。
春休みの間に引っ越しててビックリ！
てなもんですよ。
ですので今は三人で校舎を見回っています。
後で僕は消えますがね。後は二人でお楽しみくださいって感じです。
勿論、僕もマイエンジェルの側に居たいですよ。
最後くらい二人だけにしてあげたいじゃないですか。

「箒ーそこはもう良いかー？」

「ん、そうだね、次いこう。」

「ちょっちトイレ行ってくるから、二人で行っておいで。後で探して合流するからさ。」

「おうっ！」

箒の前を通りすぎる時に、頑張れって言っておきました。

「なっ！」

狼狽えておる、狼狽えておる。
ホント頑張れ！相手はいろんな意味で強敵だ！

さて、二人から別れたのですが、これからどうしましょうか。
とりあえず、用を足したのですがやることがありません。
ダンボールでもあれば、二人の様子を探りに行くのですが、無い物ねだりはしたくありません。
二人に見つからないようにブラブラしますかね。

・・・・・

うーむ。ホントに暇ですね。
なんたって毎日見ている光景ですからね。
なんの楽しみもありません。

角を曲がると、女の子が居ました。
春休みなのに珍しいですね。
あれってツインテール？って言うんですか？可愛らしい女の子です。
マイエンジェルには劣りますが。

面倒事が降ってきそうな気がするのでUターンです。

「あっ！ちょっとあんた！何で帰って行っちゃうのよ！？」

「あぁっ…めんどくさい。」

いえ、忘れ物を…。

「めんどくさい！？」

「何故本音を！？」

「今、口にしてたじゃない！？」

「わざとです。で、何ですか？」

中々ノリの良い子ですね。

一夏に通ずる何かがあります。

「ぐぬぬっ…！ふぅっ…職員室はどこかしら？」

「職員室ですか？それならそちらの階段を登っていただいて、登って右側にある渡り廊下を渡ってください。で、その正面に階段がございますので、一番下まで降りていただいて、その前の渡り廊下を渡ってください。そのまま左に曲がると階段がございますので登って下さいそうすれば職員室が前にありますので。」

僕頑張った！何度噛みそうになったことか。

「とっ、遠いわね…。ありがとう、探してみるわ。」

「頑張って下さいな。それでは。」

「あっ！あんた名前は！？」

「小田切丈です。」

「私は、凰　鈴音！ありがとう！」

「いえいえ。それでは。」

さて、あの子はいつ気付くだろうか…。
職員室はそこにあって、さっきのルート通ってもたどり着く場所はここなんですよ。

ただ、やってしまったなぁ。と、後悔しています。
彼女と僕は初対面ですからね。
いくら一夏と同じ様な人だとしても、嘘の名前を教えて、遠回りを教えたのはやりすぎだと思います。

「さて！頑張って行くかな！」

「ーーーっ！！あの！凰さん！」

「へっ？あんたさっきの…「申し訳ありません。嘘つきました。」へっ？」

僕は凰さんの後ろを指差し、「職員室はそこです。申し訳ありません。」と、頭を下げた。

「えーっと、さっき教えたのは嘘で私を迷わせようとしたってこと？」

「それは違います！ちゃんとここにたどり着けます！」

「じゃあ、何でまたそんなことを？」

「わかりません…ただ、こう…幼馴染みと会話しているような、長い間友達だったような気がしてしまいました。ごめんなさい。」

「ふぅーん…辿り着けるんだ…。なら一緒に行くわよ？お詫びをかねて案内してよね！」

おぉ…！この子優しい！
許してくれるとは…。

「任せてくださいな。ちゃんとエスコートさせていただきます。鞄持ちますよー。」

そう言いながら、僕は彼女から鞄を受け取り連れだって歩きだしました。
一人で歩くと長い距離ですが、二人で喋りながらだと短い距離なのです。
家族の事や友達の話、前の学校はこうだったー！とかこの学校はこうだよー！とか敬語やめない？とか一杯話しました。
そして彼女と僕は同い年らしく、次の学年からの転入せいらしいのです。
本当の名前もちゃんと伝えましたよ？
飛び蹴りされましたが。
違うクラスになっても仲良くしていこうと約束して、職員室の前で別れることになりました。
新学期が楽しみですねー…。

…

……

……エンジェルゥゥゥゥッッッ！！
新学期からエンジェルいない！
マイエンジェル箒いない！
楽しみじゃねぇ！！
バカヤロォォォォ！！！

## 五個目！（後書き）

（、・ω・、）＞ポンポン痛い

## 六個目！（前書き）

グダグダグーダグーダァー！
ぱねぇよー。

クリスマスネタ思い付いたので今から書いてきます。

## 六個目！

取り乱しました。

今日の出来事。

僕の女神ｉｓ箒が引っ越しするので、最後の学校見学。

←

一夏と二人っきりになれるように僕はレムオルを唱えました。詠唱は『トイレ行ってくる。』

←

校内ブラブラとさまようよろい。

←

職員室の前で女の子を騙す。

←

彼女を校内を案内。

←

「新学期が楽しみです！」

←

新学期から僕の女神様いない！ｏｒｚ　↑今ここ

って事です。

居ないですが、新しい住所になったら手紙をくれるそうなので、待ってます。

その時は三日に一回手紙を書きましょう。

呪われてそうですが大丈夫でしょう。

愛ゆえに重たくなるものです。

さてさて、ホントに二人を探さないとダメですね。
女神が熱暴走してないと良いのですが…。

・
・　・　・　・

いませんねー。
二人でお楽しみを……！？
あるわけ無いですね。
まず一夏にはそんな機能搭載されていませんね。
因みに僕の名前は鏡凛（かがみりん）です。
味醂じゃないですよ？
小田切丈は嘘です。
蹴られたから嘘は言いませんよ。
誕生日はもうすぐです。
誕生日が来れば学校が始まります。

…本当に居ませんね。
冗談抜きで飽きてきたんですけど。

「…夏、もし大人になって、もう一度会えたら…」

「ん？」

まさかこのタイミングは…。

「毎日私の作ったお味噌汁飲んでくれる？」

「おぅっ！良いぜ！美味しいの頼むな！」

イッタァァァァ！！
女神がイッタァァァァ！！
今ので俺の残機が確実にピチュッた！二つの意味でピチュッた！

「うん！一杯練習しとく！」

「任せたぜ！」

そっかー。
良かったねマイエンジェル。
なんか箒の恋が実った事で安心したのか、悔しいのか目の前が霞んできましたね。
あー。ヤバイですね。
二人を見ていられません。
僕は二人に気付かれないように廊下を走り、校庭を抜け、自宅へと駆け抜けます。

今日は何も考えたくない。
何も聞きたくない。

感じたくない。
すべてを振り切る様に走り抜け、気がつけば僕はベッドの中にいました。

あれから一時間程しか経っていませんが、かなり冷静になれたと思います。

正直言ってしまえば、僕だって箒に期待したりもしていたんですよ？
『今は一夏に向いてるけど、いつかは僕に…。』みたいな幻想を抱いたりもしていました。
ですが、やはり箒の悲しむ顔など見たくありませんし、望むなら叶えてあげたいじゃないですか。
そう思って割り切れたつもりだったのですが…所詮は『つもり』だったみたいですね。

ピンポーン

インターホンがなりました。
親は居ないみたいですね。
仕方ないですねー。『僕子供だからわかんない！』やってきますか。

「はい。」

『あっ！凛？俺俺！俺だよ俺！』

「振り込め詐欺なら間に合ってますが。」

一夏ェ…乗ってもうたやないか……。

『違うッ！？何で先に帰るんだよー！』

「あれから二人を探していたけど見つからなくてさ。しかも気分悪くなってきたから…ごめんな？」

『それなら仕方ないなー。大丈夫か？』

「大丈夫大丈夫。少し寝れば治るさ。」

一夏、悪いね。

嘘は吐いてないよ。多分きっとおそらく。

「箒もいる？」

『何？』

「最後なのにごめんな？一緒に居たかったんだけど…」

『気にしないで？絶対にまた皆で遊ぼう？』

「そうだね。また皆で一緒に。」

『んじゃ、そろそろ行くなー。ちゃんと寝とけよ。』

『ちゃんと寝ててね。…ありがとう。』

「あーい。またねー。」

僕は何をしてるんだか…。
素直に笑顔でいれば良いじゃないか。
はぁ…寝よう。

そして目を覚ませば晩御飯の時間。
母は寝ている僕を起こしてくれました。
寝ている間に泣いていたのでしょうか、涙の後があり、少し心配されました。

「大丈夫。何でもないよ。」

そう答える僕の気持ちもきっと気付いてるのでしょう。
母は特に何も言わないでくれました。

そして、晩御飯はあまり喉に通りません。
好きなおかずなのですが、今日は駄目みたいです。

「なんだ？フラれたか？」

いきなり何を言ってるんだ、このクソ親父は。

「ものの見事に。」

ウケケケケ！と笑いだした父に、居合い拳を叩き込みたくなる気持ちはわかってくれますか？
母もニヤニヤしながら此方を見ないで下さい。

「まぁ…なんだ？フラれる気持ちはよくわかる！だけどな？そこでもお前は逃げんのか？」

「逃げる…？」

「そうだ。今まで下らない理屈振り回して逃げて来たんだ。男なら逃げずに砕けてこいや。たとえ届かなくても心には残んだろうよ。」

「あら？お父さんが言うと説得力あるわね？」

「かっ…母さん…！」

「凛？お父さんてね、片思いでずっと好きだった子が居たのよ？ホントのホントにアタックし続けてフラれたのよ？重みあるわねー。」

「ダメじゃん。」

「そうでもないのよー？あの時なんてね…「もうやめてくれェェェ！！」オホホホホ！」

うん、何かこの二人見てたら馬鹿らしくなってきました。
自然と笑いが込み上げてきます。

そっか、当たって砕けるか。

うん！砕けるしか無いでしょう！

明日の朝、箒が行く前に会いに行こう。
そして伝えるんだ。ずっと好きだったって。

その日の晩は昼寝をいっぱいしたのにゆっくりと眠る事が出来た。
そう、ゆっくりと眠る事が出来たのだ。

・・・・・

取り敢えず言います。
寝坊しました！
箒の家の車が今走り出しました！
当たって砕けることすら許されないのでしょうか！？
クソッ！！気付け気付け気付け気付け…！！

……行っちゃった。
あーあ。ものすごい残尿感がある感じです。
どうしよう。
ホントに泣けてきた。

「凛？」

昨日帰らずに最後まで居れば良かったですね…。

「おーい？凛ー？」

後悔先に立たずですねー。

「だーれだ？」

おおぅっ！いきなり目の前が真っ暗に！？
とか、言いますが、今の声は…でも今行ってしまったばかりですし…。

「凛？」

「めがっ…！…箒？」

「何してるの？」

後ろを振り向くと、やっぱり女神でした。
あれ？さっきの車…。

「今ね、お父さんがガソリンスタンド行ってるんだー。」

「そっかー。」

ヤバいヤバいヤバいヤバい！！言葉がでない！なにこれヤバい！
言葉を口にしようとすると、言葉にならない声が出てきます。
落ち着け落ち着け落ち着け餅突け！餅食いてー。
違う！ホントおちつけ！

「これでお別れなんだね。やっぱり寂しいな。」

お別れ。
そうだ。
今日は砕けに来たんだ。

「ねぇ、箒？知ってる？」

「何？」

「僕、ずーっと箒のこと好きだったんだよ。うん、初恋だね。」

「え？えぇぇぇぇ！？」

箒がまさに驚愕！って顔しています。
そんな顔もまたプリティー。

「勿論、箒が一夏の事好きなこと位知ってたよ？ずっと好きで見てきたんだから。」

「えぅっ！？えぅぅっ！？」

箒の顔がマジ真っ赤っか。
照れてるのかな？
そんな僕も顔赤いだろうね。

「まっ、知っておいてほしかったんだよ。鏡凛は篠ノ之箒が好きだって事。」

「あぅぁぅぁぅ…。」

何この子マジ天使。
お持ち帰りしたい！

「さて！伝えたい事は伝えたし、最後に一言！味噌汁頑張れ。」

「なっ！？なんでそれを知って…まさか！」

「んじゃ、箒またね！いつか皆で絶対に会おう！何年かかっても絶対に！」

「えっ、あっ、うん！」

僕はその言葉を残して家路へと急いだ。
当て逃げの要領で急いで帰りました。
心音が鳴り止まない。
ずっとドキドキしてる。

取り敢えず恥ずかしかったよ！
でも、すっきりしました。
また、いつの日か出会えることを信じて、これからも頑張っていきます！

出会えなかったら犯罪でも起こすかなぁ…。
新聞の一面に乗るくらいの…。
動機は好きな子に会いたいから！うははー！
笑えねー…。

## メーリークルシミマス（前書き）

ガンダム見てたらこんな時間になっちゃって、投稿するの忘れてました。

## メーリークルシミマス

今日はクリスマス！と言うわけでして、お母さん監修でケーキを作っています。
とは言うものの、僕たちのする事などはイチゴ切ったり、イチゴ乗せたりするだけの簡単なお仕事です。
この後なんですが、マイエンジェルとクリスマスパーティーをする予定です。

「ねぇ、一夏ー。」

「なにー？」

「箒にクリスマスプレゼント用意したかー？」

「したぞー。」

「おぉっ、珍しい。」

「いつも凛に怒られるからなー。」

そうなのです。
一夏って、毎年の事なのに用意しないんですよね。
安くても良いから用意しろ！と言うのですが、今年は用意してきたみたいですね。
今年こそは「お前は俺のおかんか！？」と言われなくてすみそうで

す。

「で、何にしたのさ？」

「へへへっ！これだ！」

「└∵┘↑こんな置物。

「…誰に？」

「箒に。」

ゴンッ！

ふぅっ。思いっきり殴っちゃったぜ☆

「何すんだよ！」

「誰がこんなもん貰って喜ぶんだよ！？」

「俺は嬉しい！」

「やっぱりアホの一夏だ！」

来年からはこれ「└∵┘」を送り続けてやる！

こんなもん貰って喜ぶ女の子いるはずないでしょうに…！

「千冬姉は喜んでくれた！」

「ちー姉ぇぇぇぇ！！？」

「└∵┘↑これの何が嬉しかったんですか！？
一夏め！そんな勝ち誇った顔するんじゃない！
千冬さんは一夏から貰ったから喜んでるだけだ！

「えぇい！とりあえず却下だ！」

「なにゆえ！？」

「これを渡しとけ…。」

ここで取り出すはの一夏経由のマイエンジェルへのプレゼント。
おかんの証ってやつです。

「むぅっ。わかったよ…。」

「中身はリボンな。白い生地に赤のラインが入ったの。」

「あいあい…。ホントに凛は俺のおかんか…？」

「今年もか…。」

そして、クリスマスパーティーのプレゼント交換の時、マイエンジェルが、女神のような笑顔を振り撒いていてくれました。

因みに僕からは、手作りクッキーです。

マイエンジェル箒からは、手袋とマフラーを貰いました。

一夏からはエプロンでした。

蹴りました。

## メーリークルシミマス（後書き）

僕は今年は子供にライダーベルトをあげました。
因みに六歳の子です。

## おしょーがつー。（前書き）

あけま　して　おめで　とう　ござい　ます　。
くれま　して　さよう　なら　。
思い立っ　たの　で書き　まし　た。
会話だ　けで　成り立っ　てい　ます。

**おしょーがつー。**

「ねぇ、一夏。」

「ん？」

「何か正月らしいことしない？」

「んー？今してるだろ？」

「炬燵に入ってミカン食べながらテレビを見るのは飽きた。」

「んじゃ、なにするよ？」

「初詣？」

「しゅうきょうのつごうにより…」

「無茶は止めときなよ脳筋。」

「うるせー、もやし。」

「正月らしく羽子板でもする？」

「装備がないただの屍のようだ。」

「福笑い？」

「鏡見とけよ。」

「超絶ブーメラン。」
「鈴呼ぶ？」
「蹴られるから止めとく」
「おちょくらなきゃよくね？」
「無理じゃね？」
「鈴可哀想だな…。」
「一夏と同じ脳筋だから？」
「お前後で体育館裏な？」
「ほい、新しいお茶。」
「サンキュー。」
「…。」
「どうした？」
「この人痩せたねー。」
「最近見なかったしな。」
「癌か？」

「すぐ癌にするなよ。」
「チャンネル変えるよ。」
「おーう。」
「ＩＳかー…。」
「憧れるよなー。」
「男なら特にな。」
「ドリルだろ。」
「ロケットパンチにな。」
「「…。」」
「外へ出ろ。」
「寒いから嫌だ。」
「にしても、束さんどうしてるんだろうな？」
「また変なもん作ってんじゃね？」
「歩く自宅とか？」
「空飛ぶベッドでしょ。」

「移動式トイレに１ペリカ」
「ミサイル型人参に１０００厘。」
「透ける眼鏡もありそうだな。」
「箒探知機とか？」
「箒どうしてんだろうなー？」
「手紙来ないな。」
「元気してんのかな？」
「泣かしたやつは死刑」
「殺しはいかんだろ。」
「それこそ遺憾砲を発射。」
「ホントに箒好きな？」
「まーね。」
「束さんと語り合うだけの事はあるわ。」
「餅焼けたよ、食う？」
「食う。」

「醤油？砂糖？あんこ？」

「醤油。」

「ほい。」

「サンキュー」

「熱いから火傷しないでよ。」

「マヨネーズ止めね？」

「なんで？」

「キモい」

「お前は全僕を怒らせた、外へ出ろ。」

「寒いから嫌だ。」

「マヨネーズの良さを枕元で語り続けてくれよう。」

「箒とマヨネーズ」

「もち箒」

「あっ、千冬姉だ。」

「この前のだね。」

「やっぱすげぇなー。」

「だなー。ほい、茶のおかわり。」

「サンキュー。」

「なに!?なんなの!?あの子達のジジババ夫婦の正月は!?」

「いつからあんな老けてしまったのだ!?」

「箒ちゃんや鈴ちゃんが居ないだけであそこまで老け込むの!?」

「誰か!あの子達に救いを!!」

## おしょーがつー。（後書き）

新年のっけから何をしてるんでしょうか？

## 七個目！（前書き）

モンハン３Ｇ買ったら、ＤＩＶＡエクステンドやる時間無くなりました。
グダグダじゃありません！
マッタリ進行です。

## 七個目！

中学生になりました。
今は中学校一年生の夏休み前なのです。

僕の女神と別れてから既に二年になりました。
犯罪はまだしてません。

そんな僕も気が付けはなんか、『気』を使えるようになりました。
なにこれマジ怖いんですけど。

この気を使って色々できるようになりました。
高速移動とか、三角飛びとか、かめはめ波とか使えます。
いやいや。日常生活にいらんでしょう。
ホントに僕って何者なんでしょうか？
もしかして人じゃないとか？
漏れそうなんですけど。

前に学校で遭遇したポケモ…転校生の凰　鈴音さんですが、五年生から一緒のクラスでして、
一夏と三人でよく遊んでいます。
凰さんのご実家は、中華料理店でして、かなり本格的な中華料理をかなりお安く頂けます。
一夏が、凰さんのお父さんに気に入られたらしく、よくお昼や晩御飯をごちそうになりながら、鈴音を嫁にしろと言われてました。
逆に、僕はお母さんの方から気に入られたらしく、鈴音の婿に来ないかと言われます。
そして、口論へ…。

その後に顔を真っ赤にしながら飛びかかる凰さんが印象的です。
そんな仲良し家族ですが、最近家の中でも口論が絶えないらしいです。
何でも、「伝説の食材と呼ばれる『あれ』を求めて旅立ちたい！」と力説するお父さんと、「そんな事より現実を見て！」と懇願するお母さんらしいです。
一夏曰く、「おやッさん…！ロマンがあるじゃないか…！」との事です。
僕はロマンよりマロンの方が好きです。

美味しいじゃないですか、ケーキ。
甘党なんですよ。
コーヒー？そんなもの飲めませんよ。

そんなお父さんに最近不信な動きがあるみたいです。
何か企んでるらしいのですが、全容は掴めていません。

話は変わりますが、そして世界はまた動き出しました。
束ちゃんの作ったＩＳなんですが、実はあれ、女性にしか動かせないようになっていたらしくて、今まで前線で活躍していた男性よりも、女性が優遇されるようになっています。

ＩＳを作るには束ちゃんが作り出したコアが必要で、全部で４６７個しか作られていないそうです。
それを国家で仲良くわけわけして、研究しましょう？
てな感じです。

ＩＳは兵器としての利用よりも、『スポーツ』の様にルールを決め、その中で戦いましょう？ってなもんでして、去年…僕が六年生の時

に第一回モンド・グロッソってのが開催されました。
なんかいっぱいの部門を通じて総合一位を目指しましょう！的な感じです。
総合一位にはブリュンヒルデとか言う称号が貰え、各部門の一位にはヴァルキリーなる称号が貰えるらしいです。
そして、第一回モンド・グロッソの総合一位のブリュンヒルデ様には、一夏のお姉さんである千冬お姉さんにでした。
ぶっちゃけなにしてんの…。と思いましたね。
普段から『職業不明であまり家に帰らないのに、しっかり給料は稼いでくる不思議な千冬姉』と一夏が言っておりましたし、僕自身もあまり会えませんでしたしね。
まぁ、僕からしたら、千冬お姉さんが最強の女性ですからね。
不思議ではないんですが、世界は不思議に包まれてるので、上には上がいるんだろうなーとは思ってましたが、ここまでの人とは予想してませんでした。

そして、先週から第二回モンド・グロッソが始まりまして、千冬お姉さんが今年も出場しておりまして、三日後には決勝戦が始まるみたいです。
いやー凄いですねー。
ここまで来たら、是非とも千冬お姉さんには優勝してもらいたいですねー。
頑張れ！千冬さん！僕はあなたを応援しますっ！！

まぁ、それが原因かどうかはわかりませんが、ただいま僕と一夏、大・絶・賛！襲われ中です！襲撃されてます！

なんでやねん。

皆さんもそう思うでしょう。

僕も思いますからね。

なんか、数十人の黒いスーツのゴツい外人さんがやいのやいの言いながら走って来ます。

僕にそんな趣味はないんだっ！！

…テンパってますね…。

とりあえず、落ち着くためにも状況整理を。

学校出る。

←

鈴音とバイバイする。

←

車が横に止まる。

←

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＩＣＨＩＫＡ　ＯＲＩＭＵＲＡ？」

「ＹＥＳ！高須クリニック！」

←

「待てゴルァァァ！」

「いやあぁぁぁぁっ！」

←

そして人気の無いところへ…

うん。意味がわからない。

やはり、あのニダニダうるさい半島でしょうか？しかし、あの半島はコアを貰えなかったみたいですからね。

去年、ブリュンヒルデが決まったと気には『織斑千冬は我が国から

日本に派遣された人材ニダ！』って言ってましたからね。
誰も相手にしませんでした。
文化ですね。

それとも、一夏を誘拐して、千冬お姉さんを脅迫し、決勝戦で千冬お姉さんに負けろと迫るのでしょうか？
千冬さんが負けて得をする人または国ですか？これは多分無いでしょう。僕みたいな人間にでも、想像できる事は行わないでしょう。

…まさか！秘密結社か！？全身黒ずくめですし、危ない雰囲気ですしね。
うん。無いわ。
それなら半島のがありそうですね。

まぁ、そんなことより、今は一夏を逃がす方が先決でしょうか？
僕が捕まったところで千冬さんには心配はしてくれると思いますが、大きな影響は出ないでしょう。
一夏が捕まれば、千冬さんが『怖い』です。
ブラコンですしね。

うん。
どうにかして、頑張ろう。

「なぁ、一夏。それ、入れそうか？」

「はぁ…はぁ……これか？一人な、ら大丈、夫そうだけ、ど…？」

「なら入れ。」

「はぁっ！？」

「バテてる一夏は、ここで先に休憩しとけって事だよ。僕なら大丈夫。上手いこと逃げてみせる。」

「…本当だな？」

「一時間位教科書読んどけ。そしたら脳筋も少しは賢くもなるんだろうよ。」

「ちょっ！てめえっ！」

ウケケケケと意地悪そうに笑う。
一夏も怒った振りをするいつものやりとり。

「んじゃまぁ、行ってくるわ。」

「気を付けろよ？」

「まかせとけって。」

そう言って僕は走り出した。
気と居合い拳を使って逃げる為の道を切り開く為に。

・

・・・・

あれから三十分程経ちました。
僕が進んだあとの道には多分二十人程の人が倒れてる筈です。
結構な人数の顎を打ち抜きましたからね。
脅迫概念に迫られて、練習した甲斐がありました。
ですが、正直に言いましょう。

銃を使うなんて卑怯だ！

僕も拳圧を飛ばして攻撃してますから、あまり人の事は言えませんが、卑怯だ！
サイレンサー着けて撃つとか卑怯だ！

そんなこんなで足を撃ち抜かれて立てません。
そのままマウントポジションでかなり殴られまして、もう何が痛いのか、何が苦しいのかわかりませんが、とりあえず声にならない声が出てきます。

とりあえず念じます。
一夏来ないで！と。

「オリムライチカデテコイ！コイツヲコロスゾ！」

片言…！
違う違う。
「来るわけ無いだろうがボケ！一夏は逃げたよ！バーガッ！！？」
お腹蹴られました。
何か込み上げる感じがありましたが、ここは我慢です。
この姿を見ても出てこないように、余裕の振りなんです。
「貴方達退きなさい。」
「ミス・ミューゼル。」
「後は私がやるわ。貴方達は拘束の用意をしなさい。」
「Ｙｅｓ！Ｉ' ｍａｍ！」
「織斑一夏出てきなさい。今ならこの子の命もちゃんと助けてあげるわ。」
「だから、一夏は既に逃げたって言ってんだろ？」
「ふふっ、あなた達の監視位ちゃんと出来てるわ。織斑一夏の身柄を無傷で確保したかったのだけれど、君は少しやり過ぎたのよ。」
「ッツ！！？一夏逃げて！！こっちに絶対に来ないで！」

頭に何か固いものを押し付けられました。
きっとこれは銃口なのでしょう。

「今から十秒以内に出てこないと　、「もう止めてくれぇぇぇ！！」
あら、速い。」

「一夏のバカ…！」

出てきた一夏の顔は、涙と鼻水で酷く歪んでいてます。
僕は一夏のあんな顔を見るのは初めてです。

「ホントに凛を助けてくれるんだろうな！！？」

「えぇ。約束は守るわ。…貴方達。」

一夏が拘束されながら、僕に何度も何度も謝りながら涙を流してます。

「大丈夫。だからそんな顔しない。」

一夏が連れていかれます。
そんな後ろ姿を見送る僕は悔しくて、情けなくて、涙が溢れだしてきました。

「さて、君の身柄だけど私が連れていくわ。彼とは別の場所よ。」

「僕がここで抵抗したら？」

「抵抗は……してもいいけどしたら彼の身は保証されないわよ？」

「ですよねー。」

僕も一夏と同じように手足を拘束されて、首もとに何か刺されました。

あのチクッとした感じは注射でしょうか？

栄養剤とか痛み止めなら嬉しいのですがそんなわけはありませんよね。

ほーら…瞼が重たくなっ……てき……まし…た…。

「あぁ。君名前は？」

「おだ…ぎ…り……じょ……う…？」

も…もう……ダ……ダメ……。

## 七個目！（後書き）

リィィィィィィンちゃぁぁぁぁぁぁん！！
ミィィィィィィクさぁぁぁぁぁぁぁん！！

## 八個目！（前書き）

何かやっちゃった感がプンプンします。
Ｇｏｏｇｌｅ先生大好きです。
Ｇｏｏｇｌｅ先生に頼りきりです。

タイトル何か良いのないですかね？

## 八個目！

暗い

明るい

深い

浅い

苦しい

楽しい

狭い

広い

熱い

冷たい

暑い

寒い

わからない。わからないわからない。わからないわからないわからないわからないわからないわからないわからないわからあああぁぁぁぁあぁぁぁぁああぁぁぁああぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁあぁぁぁあぁああぁぁぁああぁぁぁぁぁあああぁぁぁぁあぁぁぁぁああぁぁぁああぁぁぁぁあぁあああぁぁあぁぁあぁぁぁぁああぁぁぁああぁぁぁあぁぁあああぁぁぁぁあぁぁあぁぁああぁぁぁああぁぁぁあぁぁ。

・・・・

「突入！」

私が率いる中隊が目の前の建物へと入り込んでいく。
本日私達が攻めいるここは、とある国の、組織の隠れ研究所の一つ。
主にＩＳの研究と開発を行い、軍事利用するための研究所。
……のはずだった。

しかし、この状況はなんだ！？

入り口を潜れば、おびただしい程の血痕が。
それは天井に、壁に、床に。
どれ程の人間の血が流されればこれ程の惨状が出来上がるのか？

それに答えるかの如く、あちらこちらの死体。
それは老若男女問わず、死んでいる。

よく見ると、成人だったであろうもの達には、血で染め上げられた白衣だったであろうものを纏っており、ここの研究者だった者達だろうか？
子供であろう未熟な体には、必要最低限の布が巻き付けられてるだけであり、その姿も血に塗れている。
双方に争った形跡も見受けられ、その死に方もそれぞれだ。

成人側には、切り裂かれていたり、押し潰されたり、捻り潰された者が多数であり、子供達側は主に銃痕が刻まれており、頭を撃ち抜かれているものや、多数の弾丸で撃ち抜かれたであろう小さき体があった。

そして、この多数の死体達は、いつからこの状況だったのか、咽る程の腐敗臭が漂っており、嘔吐するものがいるほどである。

私は込み上げてくる吐き気を我慢しつつ、部下達と奥へと突き進んでいく。

突き進んでいくのだが、死体の数があまり変わることがなかったのだが、死体の形が変わり始めた。

成人には武装した人間の姿も見受けられ、中にはグレネードランチャーや火炎放射器といった、珍しい装備を持っているものもいる。

逆に子供達は体格が幼い者から青年へと姿を変えていた。

ただ、その子等は異形なのだ。

爪や歯が刃物の様に鋭い者。

腕や足が何本もある者。

目の数が多い者。

ここでどれ程の事が行われていたのかは想像できるがしたくない。

私だってこんな現実受け止めたくないのだ。

「隊長！此方へお願いします！」

「どうした！？」

「カプセルに少年が…！まだ息はあるようです！」

「わかった！増援を呼び、急ぎ調査させよ！」

「了解です！」

私は一番奥の部屋へと足を急がせ、問題の部屋へとたどり着いた。

培養液と思わしき液体の中に、一人の少年が裸で漂っていた。

私の部下達はそのカプセルに向けて銃を構えている。

あれほどの者が大量に存在していて、そして、死んでいた。

なのに目の前には生命活動を行っているのだ。

私とて人間だ。

警戒もするし、怯えもする。

彼等の気持ちがわかる。

だが、逃げるわけにはいかないのだ。

私も武器を片手にカプセルへと近付く。

見た目は１２から１４歳程だろうか？

柔らかく幼い顔立ち。

絹のように細い髪は長い間放置されたのか、長く伸ばされている。

同年代の男子に比べれば、少し小さく、細身だが、見た目以上の筋肉がついている。

そんな体に何本もの管が刺さっている。

それらを確認をすればするほど、私の体が震えてくる。
もう二度と会えないと思っていた。
もう二度と弟と共に私を困らせる事は
無いのかと思っていた。
涙が溢れてくる。
当たり前だ！この子は私にとってももう一人の弟みたいなものなんだ！

「凛！」

・・・・・

「凛！」

りん？
その言葉に懐かしい気がする。
今の声が懐かしい気がする。

光が見える。
懐かしい何かが呼んでる気がする。
行かなきゃ。
掴まなきゃ。
そして殺さなきゃ。
守る為に殺さなきゃ。
殺せころせ殺セコロセコロセころせ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺殺殺殺
殺殺殺殺殺殺殺殺殺せぁぁぁぁ！！

・・・・・

私の声に反応するかの様に、口から息が吐き出された。

「凛！聞こえるか！？私だ！千冬だ！」

「たっ、隊長！？落ち着いてください！」

凛へと歩み出す私の腕を掴み、部下の必死な言葉に、私は少しだけ冷静さを取り戻すことができた。
確かに私にとってはこの子は重要だ。
だが、私は今人の命を扱う身。
私の判断が狂えば、全員の命が危険に晒される。

「くっ…！皆…すまない。…各員！麻酔弾の用意を！この子の保護を行い、証言を得たい！調査班が来るまで警戒せ……！」

とくん…

今の音は何だ？
聞きなれたようなそうでないような？
私のカンが危険を告げる。
これはヤバイと。

とくん…とっくん…とっくん……

「たっ、隊長！これを！」

部下が指し示す先には、先程までは何も表示されていなかったモニターが、動き出していた。
モニターには人体の図が描かれており、その人体の胸の部分……心臓部が異常を指し示すかの様に、赤色のランプが点滅している。
という事は、先程からのこの音は、心臓音か！？

「総員迎撃用意！」

「はっ！」

パキパキパキ…と、カプセルに罅が入り出した。
それと同じくして、ろくに動かなかった凛が動き出した。
まるでカプセルを突き破るかの振りかぶり……！！

「来るぞ！？」

「なっ！？『ガシャァァァンッッッ！！』まさか！？」

「死ねぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

カプセルのガラスが割れると同時に飛び出してきた凛は、手前に居た部下を殴り飛ばした。

昔からそうだがやはり速い！

凛はいつものように、ポケットに手を入れる仕草を行った。
あれは、たまに行っていた謎の構えかたで、居合い拳とかなんとか言ってた記憶がある。

……？

何故使わない？それに動きを止めた今なら…！

「撃て！」

十数回の発砲音が響き、凛の背中と太股などに着弾を確認できた。
これで鎮圧できれば良いのだが、私の頭の中の警笛は今も鳴り響いている。
私はＩＳ用の近接ブレードを呼び出し、凛の動きに注意する。

「…ｂｅ　ｄｏ…！」

むっ？

「…ｏｕ　ｄｉ…！」

凛が何かを呟いている…？

「……ｉｌｌ！！！」

凛の叫び声と共に、辺り一面を覆うような眩しい光が溢れだした。
その光が収まったとき、私は目の前の状況に理解が出来なかった。
私の位置からは部下の表情は見えないが私と同じ様な表情をしているだろう。

なぜなら

男である凛がインフィニット・ストラトスを身に纏っているのだから。

## 八個目！（後書き）

今回は一応千冬お姉さま視点で進めました。
かなりの適当です。
ごめんなさい。

次は遅くなるかもです。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4333z/

タイトル考えてないの投稿時に気付きました

2012年1月8日21時47分発行